



学生が中心です。ついこの間も「たるウィン」という小樽のお菓子をアピールする祭りをやりましたが、市や商店街、小樽警察署などたくさんの支援がありました。

小笠原：学生がそのような活動できるのも、先生たちの陰ながらまたは、全面的な支援があるという小樽商大の風土ですね。

市民向けの定例報告会を

小笠原：たくさんの先生や学生がさまざまな活動をおやりになっているようですが、「これが小樽商大の地域とのかかわりですよ」という、市民にわかりやすく伝わっていないように思えますね。

松本：情報公開ということでは、小樽商科大学のホームページを見れば商大の先生たちの活動やその報告を知ることができますが、ホームページは見ようと思った人でなくては見ませんし、見てほしければ大学も、市民に向けてそれなりの情報発信をしなければいけない。公開講座という形では行われていますけれどね。

小笠原：そうですね、公開講座は地域貢献と言えますね。一方では、テレビなどを通してここ3年ほどは、一般市民も「小樽商大の先生たちは、最近ががんばっている」という印象を持って

学外に情報発信して地域の役に立ちたい

地域における大学の役割がますます求められるなかで、さらなる地域貢献を目指すために、日頃から地域で活躍する松本教授と齋藤助教授に市民が加わり、地域について熱い思いを語り合いました。

商大をもっと活用してほしい

小笠原：松本先生と齋藤先生は大学以外の公職をお幾つくらいおやりになっているのですか？

松本：主なものは小樽市の地域活性化のための地場産業振興会議、道の外郭団体である中小企業総合支援センターの審査委員など、全部で9つの委員をやっています。

齋藤：小樽市の地域経済活性化会議と、道の商工業振興審議会、こらぼ北海道の事業企画を審議する会の委員など全部で6つの委員です。

小笠原：小樽というよりは、北海道全体での活動ということですね。

松本：道や国が小樽だけをターゲットにして何かをやることはありませんからね。そのような状況もふまえることは、小樽の企業や事業者の方々が数多くいらっしゃるわけですが、たとえば商大の先生を呼び込んで、自分達でプライベートな組織を作り、そこで

考えていくという自主的な動きが薄いと感じます。身近な商大の人材をもっと活用するという気持ちがほしいと思っています。

齋藤：小樽企業経済経営研究会でもよい取り組みをされていると思います。毎回ゼミナール形式で、求めに応じながら、そこでディスカッションをくり返していく双方向な交流ができました。一方向な講演会ほどつまらないものはないですから。細かなものを密度を濃く、継続的にやっていくことが大事だと思います。

松本：教官と学生と一緒に事業プランを立て、企業の要請を取り込んでやっているという授業があります。学生の勉強を地域の方といっしょに教えたり教えられたり、という感じで。この場合、教官がリード役ですが、教官がサポート役になっているケースがビジネスアイデアコンテストですね。これは

【さいとう・いさむら】
齋藤 一朗

商学科・商学講座 / 助教授

昭和60年 東北大学経済学部卒業
昭和60年 株式会社第一勧業銀行入行
平成6年 北海道大学大学院経済学研究科修士課程修了 平成6年 小樽商科大学赴任
北海道財務局財務行政モニター
北海道未来総合研究所客員研究員
室蘭テクノセンター地域新生コンソーシアム研究開発事業研究開発委員
北海道商工業振興審議会、小樽市地場産業振興会議ワーキング・グループ、北海道科学技術総合振興センター北海道産学官協働センター運営委員会事業企画WGなどの委員を歴任。

